



2022 年

10 月 第 3・4・5 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 10 月 16 日 : ルカ福音書 10 : 29—37 .

『 渦中の献身 』

・ 10 月 23 日 : ルカ福音書 12 : 13—21 .

『 虚 実 』

・ 10 月 30 日 : ルカ福音書 12 : 22—34 .

『 命の幸い 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

サマリアは、ユダヤとガリラヤの中間地点にあり、そこが両地域の通過点としてのみ語られる場合、乃至は歴史的に民族や宗教が混淆する異空間として否定的に語られることの多い地域です。そればかりか、ユダヤ人とサマリア人との間には払拭し難い相互不信が存在しました。

けれども、イエスの譬え話の中に出てくる一人のサマリア人は、話の中に登場するユダヤ人の比較的高い地位にある人々よりも、はるかに優れた人格者として描写されます。

おそらくは実話であると思われる譬え話の、事の起こりは、様々な民族が日々往来する、二大都市のエルサレムからエリコに至る、高低差約1000メートルの下り坂の交通路でのことです。2000年後の今日でも、このあたりは中東地域の犯罪多発地帯の一つだそうです。二大都市間の交通路は古代、商人たちの行き交う主要貿易路でもありました。護衛を従えた隊商ならまだしも、個人で路を往復する人々の所持する金品が盗人らに巻き上げられる事件は当時も多発しておりました。

そんなある日のこと、道端に強盗事件の被害者と思われる一人の半死半生の怪我人が倒れています。下手に救助に向かうと二次被害に遭遇する恐れがあります。通行人が個人で行動を起こす危険性は誰もが認識していたようです。新宿駅で酔っ払いが昏倒していたら駅員さんに頼めば済みますが、2000年前の交通路には交番さえありません。人手が足りなければ見て見ぬ振りが横行してしまいます。

その時、後から一人のユダヤ人の祭司が同じ道を通りかかります。人々の健康状態をチェックするのも彼の仕事の一つです。それがユダヤ人の社会復帰や隔離措置の基準となります。けれども彼は医者ではありません。見て見ぬふりは幸いにして、彼の職業倫理に抵触するわけではありません。さらに、その後から今度は一人の、祭司に従属する立場のレビ人が、同所を通りかかります。前者との個人的な関係はなさそうです。彼にはユダヤ人の健康をチェックする任務はありません。さて、どうするのか見ていると、この人も祭司と全く同じ行動をとります。どちらも地位のあるユダヤ人でした。被害者の怪我人の運命やいかに…。

三人目にそこを通りかかったのが、彼らとは他民族のサマリア人の商人でした。彼は一般の通行人が所持していないはずの、あてがう布やオリ

ブ油、さらには葡萄酒を使用して怪我人の傷に応急手当を施し、家畜に乗せて宿に連れて行き、一晚、介抱したのです。翌朝、怪我人を宿に預けて清算し、帰りに再び宿に立ち寄ることを確約して立ち去りました。

このストーリーは、もともと、ある律法の専門家がイエスに問うた質問の答えとして語られたものです。律法にある至言の一つとして、「隣人を自分のように愛しなさい」という教えに関して、「隣人愛」を語る以前に「隣人」とは誰なのかという、「隣人」を特定するための、不毛な議論が吹っ掛けられていたのです。神の愛の本質を理解せぬままに。このままでは隣人愛は、その「受給資格？」の是非の問題に矮小化されてしまいます。これに対し、イエスの答えは、隣人愛とはけっして限定的に行使されるものではないことを、サマリア人の博愛精神を通して、質問者の狭隘な本性を正したのです。

《 虚実 》 《 命の幸い 》

空しいものや偽りの言葉を私から遠ざけ、貧しくもせず、富ませもせず、私にふさわしい食物で私を養ってください。

（聖書協会共同訳聖書 箴言 30：8・9）

ある日、イエスが大勢の群衆を前にして話をしていると、中から一人の人物が、親の遺産分割のことで助言を求めてきます。しかし、イエスはその求めに対し、自分は裁判官ではないと断ります。その時に、イエスは愚かな金持ちの譬えを用いて答えます。

その金持ちはある年、予定外の大豊作に恵まれます。ところが既存の蔵では保管する場所が足りません。大きな蔵に造りかえようと目論見を立てます。そうすれば、余生は、休んで食べて飲んで、悦に入ればよいと。ところが人間は自分の寿命をほんの僅かでも延ばすことが出来ません。いつかは神によって取り去られてしまうのです。「自分のために富を積んでも、神のために（神に対して）豊かにならない者」の命は儚いと、イエスは教えます。「自分のための富」とは、結局、後から遺産分割の問題を引き起こすだけなのだ。

さて冒頭、引用した箴言30章の言葉の意味するところは、この作者は一度、人生に躓いていたことがわかります。おそらく「空しいものや偽り

の言葉」で。章の最初に、その人が「神よ、私は疲れた。(30:1)」という言葉二度、述懐するところから始まっていることからわかります。現代人がここを読むと、この人は事業に失敗したのか、詐欺に騙されたのか、様々なケースを考えます。おそらく何かに懲りたこの人は、愚かな金持ちとは違い、晩年は適度に生きること、程々に暮らすことを望んでいるようです。「知恵も知識もない自分(30:4)」は人生に躓くのだ。だから、「空しいものや偽りの言葉」に騙されたのだと。最近、ワイドショーに度々、登場するあの教団に眩惑された人々が、本人ばかりか、子や孫までもが人生を破壊されてしまうケースが繰り返し報道されています。さらにこの教団の、政界等々様々な分野との結びつきが指摘されています。おぞましい限りで、怪奇映画を見せられているようです。

さて、この「神よ、私は疲れた」と悲嘆に暮れる作者に対する答えがどこかにあるとすれば、例えばその答えは、この文書(箴言)の次に編まれた「コーヘレトの言葉」、すなわち「伝道の書」の中に、見出すことができるかもしれません。

若き日に、あなたの造り主を心に刻め。(12:1a)

人生50年に、はるかに満たない古代人の「若き日」が、いかなる年代を定義したものかはわかりません。現代人の尺度からするともうこれは、あなたが死ぬまでにと読み替えても、大差のないことなのかもしれません。「神よ、私は疲れた」と言う前に神(=造り主)を「心に刻む」ことが大切です。なぜならこの直後にはこう記されていたのです。

災いの日々がやって来て、「私には喜びがない」という齢に近づかないうちに。(同12:1b)

災いの日が、生老病死のいずれかで起こりうることは間違いありません。それまでに造り主を心に刻めば、終わりの日に自分が召されることも同時に悟ることができます。この世の財産は売って施しなさいとイエスは勧めます。さらに、「古びることのない財布を作り、尽きることのない宝を(この世にではなく)天に積みなさい。(ルカ福音書12:33)」と。この世で必要な物は、全てをご存じである「あなたの造り主」に委ねよと。